

# 沖ノ島の自然と祭祀遺跡

岡 崇

## はじめに

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産登録五周年を迎えたことを記念して、海の道むなかた館では「祈りの原風景―沖ノ島の豊かな自然展―」を開催した。この企画展は信仰の原点である自然をテーマに、戦前戦後に実施された沖ノ島の自然に関する調査報告をベースとして、二〇二二年五月末と六月上旬に実施した福岡県希少生物沖ノ島調査で得られた知見を踏まえ、現在の地質や植物、動物（哺乳類・爬虫類・鳥類・陸生貝類・昆虫類）を紹介した。

本稿では、沖ノ島研究の第一巻で「沖ノ島の自然」を寄稿して以来、これまで得られた沖ノ島の自然に関するトピックを紹介し、沖ノ島での祭祀の場となった巨岩と植物について再考する。

## 一 昭和十年代の沖ノ島の地名

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰに集録されている「宗像の島々…小呂島、沖ノ島、大島の歴史と地誌」pp. ⑤ - 27 (157) 服部英雄氏のかでユス谷や山路川の所在が確認できないとされたが、一九三五年に発刊

された第一巻第六号福岡博物学雑誌には、著者の竹内亮（たけうちまこと）氏による原図である「沖の島の地形見取り図」のなかにそれらの地名と位置が記されていた。

ユス谷のユスはイスノキの方言であると書かれ、白岳の北側に延びる谷にイスノキが数多く生育していた場所であったことから名付けられたようである。さらに、山路川はオタカに流れ出る谷の名称のようで、実際には水量などはなくワジ川のようなものである。この谷とオタカの付け根には今も二つの井戸があり、これを当時は御神水と呼んでいたようである。神宝館に保管されている植物標本のなかにあった一九六二年に採集のミドリハコベのラベルには、採取地点の表記にビツクリ坂の名称が記されていた。このときビツクリ坂がどこなのか不明であったが、この原図によって、今の南側に面した管理道の急な坂道を指すことがわかった。

## 二 新種の発見と絶滅

沖ノ島から過去の調査で新種として登録され、学名に沖ノ島を冠する三種を紹介する。



オキノシマコジネズミ→後にオキノシマジネズミと改名

(*Crocidura suavealens okinoshimae* (Kur.4 Uchida))

名称からネズミのイメージが強いが、どちらかというとモグラに近い仲間である。だが、モグラのように地面に穴を掘って地中で過ごすという点とはなく、草原地帯の叢のなかをはい回って生息していたようである。

数多く生息していた昭和三十(一九五五)年代には、現地調査によってオス一匹が捕獲され、このときオキノシマコジネズミという名でタイプ標本として九州大学に保管された。その後昭和三十七(一九六二)年に三体のメスの死体が捕獲され顎などの特徴からジネズミの仲間であることが確認された。現在はオキノシマジネズミと呼んでいるが、それ以降沖ノ島では本種の



写真一 オキノシマジネズミの標本 (九州大学所蔵)

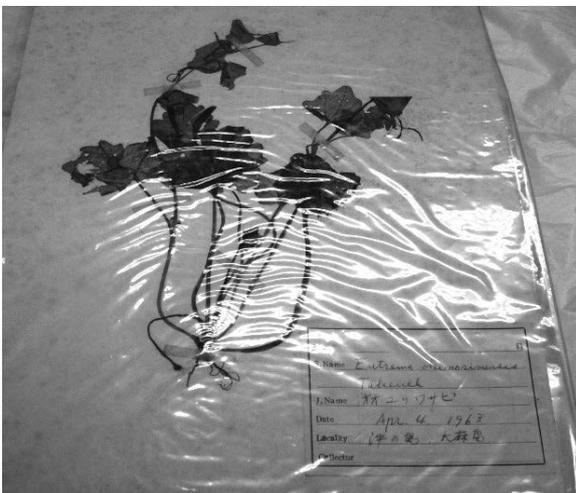
報告や確認がなされておらず、今年六月のほ乳類調査でも生息していそうな大麻畑に数多くの仕掛けを施したが全く捕獲することができず、死体すら見ることができなかったことから絶滅した可能性が高いと考えられている。このタイプ標本は九州大学移転に伴って標本の存在そのものが危ぶまれていたが、ほ乳類担当の渡部登氏の協力で、約七十年ぶりに九州大学の伊都キャンパスの冷蔵庫のなかで

保存されていることが確認できた。

残念ながら今は生きている姿を現地で見ることはできないが、今後、DNA鑑定などを行うことによって沖ノ島にいた単なるジネズミの仲間なのかオキノシマジネズミとしての固有の亜種なのか判別できる日も近いのではなからうか。

オオユリワサビ (*Eutrema okinosimense* (Taken))

沖ノ島がホロタイプとして昭和十(一九三五)年ごろに新種記載されたものである。当時のオオユリワサビの生育地については「溪谷の湿地に生じ大麻畑、御神水、ユス谷などに未らる。大麻畑には樹陰に稍大成る群落を成せり。特産なり。」と記され、湿った谷地にかんりの数の株が生育していたことが伺える。一九六四年の報告には、「大麻畑一ヶ所に群生している。御神水、ユス谷少。」と記され、戦後もまだ生育が確認されていた。ところが福岡県希少野生生物レッドデータブック二〇一一年ではついに絶滅となり今では沖ノ島での生育が確認できなくなってしまった。日本では、沖ノ島での発見後、徳島県や福島県、北海道からも生育が確認されている。



写真二 オオユリワサビの標本 (宗像大社神宝館所蔵)

いる。御神水、ユス谷少。」と記され、戦後もまだ生育が確認されていた。ところが福岡県希少野生生物レッドデータブック二〇一一年ではついに絶滅となり今では沖ノ島での生育が確認できなくなってしまった。日本では、沖ノ島での発見後、徳島県や福島県、北海道からも生育が確認されている。

オキノシマツチゾウムシ (*Trachyphlus okinoshimanus* Morimoto)

昆虫では沖ノ島唯一の固有種で、二〇一五年に新種として登録された。ツチゾウムシ属としては大型で体長五〜五・五mm、緑と銅色の鱗片を持つ個体がある。沖ノ島に今も生息する唯一の新種である。

このほかにも沖ノ島に生息するパラタイプとしては、ヨツボシハナコブヒメゾウムシ (体長三〜四mm) やハマベヒメテントウ (体長二mm) が知られている。



写真三 オキノシマツチゾウムシの標本 (城戸克弥氏提供)

### 三 原始林のなかの植樹

「沖の島原始林」として国の天然記念物に指定され、現在も「一木一草一石たりとも持ち出してはならない」という禁忌によって手厚く保護されているが、逆に本土から植林された樹木も多く、現在の沖津宮のご神木と

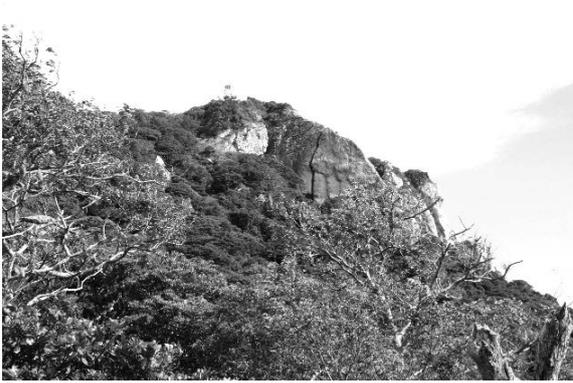
なっている杉も幹の大きさから約三〇〇年前に植樹されたものと考えられている。社殿が建立された際に植樹されたものなのかもしれない。

なかでも特筆すべきは、ウメ (献木一九三五社殿裏一九六四) やスモモ (献木一九三五)、ビワ (沖津宮社殿付近林下に点在。移植原木より繁殖せるものと思われる一九三五)、ミカン (献木一九三五)、ザボン (献木一九三五社殿裏献木一九六四) などの果物類が社殿周辺に生育していたということが知られている。沖ノ島に自生しない上記の果物類がいつごろ献木として移植されたのかはわからないが、島に食料として果実のなる樹木を植えたいという心理は、神様にも捧げるといふ意味も含め人の行為としてむしろ自然のことなのかもしれない。また、ミカンの原型とされるタチバナも (喬木林中に点在し稀なり一九三五社殿付近林中少一九六四) 生育していたとの報告もあり、青柳種信『瀛津島防人日記』の「家に有り橘樹をもてまいりて御前に植える。」が生育していたものであろうか。

いずれにしても戦前に渡島したものが植樹し、次に渡島したものが実った果実を口にできるよう代々植樹してきたものとも考えられるが、一九七〇年代以降、その必要性もなくなり、沖ノ島の自然環境にも適応できず絶えたと考えられる。

### 四 沖ノ島祭祀遺跡の巨岩群と植物

視覚的に圧倒される巨岩群とそれらを取り巻く植物群、聴覚的に心地の良い風の音、波の音、鳥のさえずり、嗅覚的に陸地を感じさせるシマモク



写真四、五 沖ノ島祭祀遺跡から見た一ノ岳と海域（九州本土側）

セイの花のさわやかな香りやオオミズナギドリの独得な香り、これらを総合的に感じ取ることによって沖ノ島に神の存在を意識する感覚が生まれるのであろうか。

それらが基盤となって構成される磐座神籬が沖ノ島祭祀の場として成立したと考えられる。

#### （一）祭祀遺跡の巨岩群

沖ノ島の巨岩群は、白色凝灰岩と呼ばれる火山由来の岩石である。沖ノ島そのものを構成する岩石は、南西隅の一部に露出する対州層群と呼ばれる頁岩と砂岩の互層で構成される堆積岩が基底層となり、その頁岩を巻き込んで堆積した凝灰岩とさらに島本体の大部分を占める白色凝灰岩に分類することができる。沖ノ島祭祀遺跡の巨岩は白色凝灰岩が節理にそって割れ、沖ノ島の母体から剥れ落ちたものが再度、転石として地

面に留まったものである。沖ノ島の全体的な地形を見ても島の北側は、比較的緩傾斜であるのに対し、南側は急傾斜となっていて、安定勾配となる標高九〇mより下方の谷地に巨岩の転石が認められる。このような場所は、黄金谷をはじめ兵舎跡付近など島の南側に点在するが、祭祀の場として使われた巨岩は沖津宮社殿の前を南北に走る小規模な谷地形に沿って点在する。それぞれの巨岩転石群の特徴は以下の通りである。

黄金谷は沖ノ島の中でも広く深い谷であり、巨岩群は祭祀遺跡周辺よりも個々の岩の規模が大きく数も多いことから人が一度入り込むと方向感覚を失い危険である。沖ノ島の最高峰である一ノ岳は直接望むことはできないが、全体的には直接海を望める場所は少ない。また、オオタニワタリの群生地もあり、常に湿度が高く風通しのあまりよくない環境である。

兵舎跡周辺の巨岩群は、沖ノ島祭祀遺跡周辺の巨岩群と似た規模で、主に沖ノ島の西側崖面から剥れ落ちたものである。転石の場所からは、直接一ノ岳を望むことはできないが、海（南側から南西側）を望むことはできる。このようにして考えると一ノ岳を望むことができ、海（南側から南東側）も望むことができる好条件に沖ノ島祭祀遺跡の巨岩群が位置していることがわかる。

#### （二）祭祀遺跡を取り巻く植物群

沖ノ島において生育していた植生が古代から現在にかけて全く同じ種類ということとは考えられないが、指定名称にもなっている「沖の島原始林」を代表するタブノキやシマモクセイ、マサキ、ムサシアブミなど大きく変



ヤブツバキ  
マサキ  
タブノキ  
ヤツデ  
ノシラン  
ヤブラン

写真六 沖ノ島祭祀遺跡と植生（一例）

化することはないと考えられる。となると現在目にする沖ノ島祭祀遺跡の巨岩群と植物群が一体となった情景は、古代から現在までさほど大きく変化していないことになる。沖ノ島全体をみると残念ながら、戦前戦中の軍道や砲台、弾薬庫、兵舎など軍事施設の整備が大きな影響を受け、所々伐採もおこなわれたようであるが、沖津宮社殿周辺は軍であっても手を付けないという宗像神社との約束が守られ今も原生状態が維持されている。

沖津宮社殿周辺の祭祀遺跡内は、どのよう

な植生で構成されているのであろうか。

高木層では、タブノキを筆頭にシマモクセイ、ホルトノキ、クワノハエノキ、ヤブツバキが上位を占める。中木層は、マサキ、アオキ、ヒゼンマユミ、ヤツデなどが主に生育し、低草層では、ヤブラン、ノシラン、オオナルコユリ、ムサシアブミ、ヒゲスゲなど、蔓性植物ではフウトウカズラが岩を覆い、シダ植物ではオオタニワタリを筆頭にオニヤブソテツ、オリヅルシダなどが祭祀遺跡を演出している。

### 五 自然調査の今後の展望

古くは正平年中行事のなかで「瀛より竹を従えり」とあるように十四世紀代には、沖ノ島に竹の存在が認められ、『瀛津島防人日記』では、ビロウの存在や金色の海鼠、ホトトギスの鳴き声を聞いたとも記されていた。大正十五年に「沖の島原始始林」として天然記念物に指定され、昭和に入ってから、動植物の調査も盛んに行われた。なかでも昆虫類や陸生貝類では、同種といえども対馬産と九州本土産とでは特徴が異なる事からその間に位置する沖ノ島ではどうなのかといった具合に、さまざまな研究者から注目を浴び調査報告としてまとめられた。

禁忌によって一般の人々の上陸を制限したことによって守られてきたとはいえ、一九七〇年代以降、オオユリワサビやオキノシマジネズミの絶滅（このほかにもヒゴタイ、コバノイラクサ、ハイビヤクシン、ツメレンゲも現在確認されていない）、小屋島では一九八七年以降ネズミの侵入によっ

て希少種のカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメが激減し貴重な繁殖地が脅かされ、生息数は未だ戻っていない。最近では沖ノ島の特徴でもあった巨大化していたムサシアブミやナンゴクウラシマソウの葉の小型化やタブノキの枯損率の高さも危ぶまれている。

世界遺産の価値を保存することは祭祀遺跡のモニタリングと合わせ自然環境の変化もこれまで以上に観察していく必要がある。沖ノ島の基礎資料となるデータは比較的整っている方ではあるが、今回動植物の一覧表を整理する中で昆虫類では、ハチ目やバッタ目、トンボ目などの種類がほとんど分かっておらず、キノコ類や菌類の調査においては手つかずの状態である。また、島から持ち出して分析をすることも禁忌によって不可能であることから、島内での調査手法や保存の在り方についても今後検討していく必要がある。

(宗像市世界遺産課)

## 参考文献

### 一 植物

本田正次・吉川霽・品田穰 文化庁文化財保護部 一九七二 「天然記念物辞典」

第一法規出版株式会社

竹内亮 一九三五 「沖の島産維管束植物目録」『福岡県博物学雑誌』 第一巻

第六号

福岡県高等学校生物部会 一九六四 「沖の島の種子植物」『生物福岡』 第四号

※植物については福岡県保健環境研究所須田隆一氏のご教授による。

### 二 動物

#### (ア) ほ乳類

黒木茂・林宏・吉田博一 一九六六 「沖の島のほ乳類について」『沖の島

生物総合調査報告 VII. 沖の島の陸生脊椎動物』 生物福岡 第六号

※オキノシマジネズミについては、渡部登先生はじめ九州大学岩森巨樹氏、金子たかね氏の協力で標本を確認することができた。コウモリ類などほ乳類全般については衣笠淳氏の協力を得た。

#### (イ) 爬虫類

黒木茂・林宏・吉田博一 一九六六 「沖の島のトカゲについて」『沖の島

生物総合調査報告 VII. 沖の島の陸生脊椎動物 生物福岡』 第六号

※ニホントカゲについては北九州市立自然史歴史博物館江頭幸士郎氏よりご教授いただいた。

#### (ウ) 鳥類

黒木茂・林宏・吉田博一 一九六六 「鳥類の生態観察」『沖の島生物総合調

査報告 VII. 沖の島の陸生脊椎動物 生物福岡』 第六号 黒

環境省自然環境局 生物多様性センター 二〇二二 『モニタリングサイト

一〇〇〇 小島嶼(海鳥) 調査報告書』

※沖ノ島の鳥類一覧や写真については九州環境管理協会岡部海都氏の実績によるものである。オオミズナギドリ、カンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメについては北九州市立自然史歴史博物館中原亨氏からご教授いただいた。

#### (エ) 陸生貝類

山本愛三・魚住賢司・林敏雄 一九七七 「筑前・沖ノ島の陸生貝類 壱岐の生物―対馬との対比―」長崎県生物学会

※沖ノ島の陸生貝類の種数は、宮崎晋介氏、石橋猛氏の実績によるものである。

(オ) 昆虫類

福田浩・志賀正和・大熊千代子 一九六七 『沖ノ島生物総合調査報告Ⅷ 沖ノ島の陸産脊椎動物』・pp.53―61

城戸克弥 二〇〇七 「福岡県宗像の甲虫相」『KORASANA』通巻75号別冊 久留米昆虫研究会

城戸克弥・江頭修志 二〇一八 「福岡県沖ノ島産甲虫類の追補」『KORASANA』通巻八十八号別冊 久留米昆虫研究会

矢田脩 二〇一九『昆虫と自然 特集 / 世界遺産「宗像・沖ノ島」の昆虫たち』ニューサイエンス社

※甲虫目は城戸克弥氏が網羅的にまとめられている。またチョウ目チョウ類は西田迪雄氏、鈴木光氏、田中隆義氏、蛾類は佐々木公隆氏からご教授いただき、写真撮影では加藤陽一氏、大山憲男氏の協力を得た。

(カ) 全体共通

福岡県 二〇一七 『福岡県レッドデータブック 福岡県の希少野生生物』

福岡県 二〇一四 『福岡県レッドデータブック 福岡県の希少野生生物』

宗像市自然環境調査研究会 二〇〇七 『宗像市自然環境調査結果報告書』(目名、科名は Wikipedia を参照)

宗像市自然環境調査研究会 二〇一七 『宗像市自然環境調査結果報告書』(目名、科名は Wikipedia を参照)